

幸せの青い鳥はどこに～あなたの欲しかったものは何ですか？

第2回： WTO と市場経済

～「ここには、ありとあらゆる幸福があります。お金を持っている幸福、なまけて遊ぶ幸福、お腹がすかないのに食べる幸福、のどがかわいてもいらないのに飲む幸福、誰かをいじめて楽しむ幸福…」

「そんなのはみんな、幸福じゃないよ!」、「そんなのが幸福なら、わたしは欲しくないわ!」～

貧しさの指標のひとつとしてお金、そしてモノが取り上げられることが多い。そのお金＝貨幣経済を世界に組込んでモノの動きを操作しようとしているのが WTO システムである（WTO の概要は 4 ページ参照）。果たして、それはどのようなもので、どのような影響を与えているのか？ それは我々に「夢」や「希望」や「幸せ」をもたらしてくれるものなのだろうか？ WTO の前身、GATT の時代にも貿易の自由化をめざしていたが、農産物は除外されていた。気候風土に影響される農業生産は、国ごとに異なる条件を抱えており、工業のように同じモノサシでは計れないため、比較生産費理論（生産費が相対的に低い物を自国内で生産し、他は輸入した方が有利）が適用されにくかったからである。しかし、80 年代の世界的な農産物過剰を背景にして、これまで「聖域」だった農業分野も自由化させようという動きが、農業生産力に恵まれた農産物輸出国を中心に起きてきた。世界中の農産物市場を一体化して考え、効率的生産をする国に供給を任せるのがグローバル的思考（＝実はアメリカン・スタンダード）から好ましい、という理屈である。

途上国では、いやがおうでも先進国から売りつけられる大量の消費資材が入ってくる。電化製品、自動車、服飾品等々… 人々は、魅力的に見えるそれらを欲しいと思うのだ。でも買うには、お金が必要だ。だから、現金収入の道を探らなければならない。だから、日々の生活を第一次産業に頼って暮らしている途上国の人々は、これまでの生活パターン（＝自給自足）を壊しても、環境を破壊しても、商品作物を作りたがる。お金を手に入れるために…。

一方、売りつける当事者の一人である我々日本においては、関税化によってコメを除く安い農産物が大量に入ってくるようになってきた。しかし、高コスト・高賃金そのまま商品の価格に跳ね返る日本の農家が作る作物は国際的な価格競争力はないのが現状である。安い農産物が輸入され、市場に出回ると、日本の農家は太刀打ちできず、収入は減り、あげくには農業を捨てる農家も出てくるし、実際出てきている。結果として、管理できない農地が増え、農地が捨てられることによって農地が疲弊し、農地のもつ環境調整能力が無視される。また途上国においても、「国際化」、「市場経済化」という名のもとに地域の独自性が壊され、農地が荒れていき、しかし一方で人々の暮らしは必ずしも「豊か」にはならない。

こう考えると、WTO の枠にはまるということは、例えば先進諸国のように利益を得る人々がいる反面、貿易の自由化という名のもとに途上国において犠牲を強いられる人々がいるのが現状である。また、WTO システムによって地域の独自性、伝統性が無視され、世界的な均一化の中にはめ込まれるおそれがある。WTO のシステムでは貿易拡大のための開発による環境破壊阻止の重要性が叫ばれているものの、現存する農地の環境保持能力を維持することに配慮しているかは疑問である。

(P.4 へ続く)

